

基調講演

日本には世界でもまれな長く深い独自の読書文化がある。読書は私たちに大きな力を与え、人と人をつなげる重要な役割も担っている。いい本がどれだけ流通し、まじめに読まれているかで社会資本の豊かさもわかる。

私の祖父は1920年代に大朝のアイランドから米・ニュー・ヨークに移住した。石造りの集居住宅が立ち並ぶ古い下町には様々な民族が住んでいて、言葉も宗教も違う。犯罪も多かった。祖父母たちは強固なコミュニティを築いた。次の世代を養い、

東大教授 ロバート・キャンベルさん

朗読で深まる人とのきざずな



1957年、ニューヨーク生まれ。ハーバード大学大学院修了。85年から九州大学に留学し、講師を務める。国文学研究資料館助教授などを経て2007年から東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻は日本文学。著書に「J・ファンガク」など。テレビの語学教育番組やクイズ番組などに出演中。

きちんとした教育が受けられるようにと、生懸命だった。仲間が集まると多量の歌を歌い、詩を朗読した。

私は様々な本を買い与えられ、相母は読み聞かせをしてくれた。おしゃべりや笑い声が絶えない環境にあって、私は声を出して読む習慣があった。しかし、小学生になった時、母は先生に「静かに読めるようにしよう」と注意されたという。祖父や父は様々な歴史の分岐点に立ち会った。それが私の読書歴に影響を与えた。

日本の江戸期や明治初期は、文字を筆で書きながら集団で読み上げ、文字を覚えた。私のなじんだものに似ている。でも「いろは」と書いたのはなく、手紙を教科書にして文字をなぞるという世界でも珍しい方法だった。手紙を読んだらコミュニケーションについても学んだわけだ。集団で声を出して、読み聞かされた場合に年長者が指摘してくれるの面白い。

私も東大で学生に文学作品を朗読させている。難しい理論について尋ねるよりも、わすか3行でも読ませれば、理解しているかどうか分かる。それは漢字や平仮名、カタカナが合わさった複雑な表記言語である日本語の特性だ。

東京の湯島には幕府直轄の昌平坂学問所があった。全国から集められた秀才が自作の詩や文章を読み上げ、合評することで、身分や年齢、地域を超えて互いの距離を縮め、きずなを深めた。読書にはそうした作用があることを当時の

人は知っていたのだと思う。

私はNHK教育テレビの番組「J・ファンガク」で、日本文学の名作を英語で紹介している。日本語の独特の力を発見する一方、外国語を学んで人とコミュニケーションを持つとうとする原動力は何なのかと考えてきた。

日本語と英語には微妙な溝がある。多分、埋めることのできない差異だ。私が見つけた一例を挙げると、若山牧水が明治41年に初めて自費出版した歌集「海の声」に「白鳥は哀しからず、空の青海をあそぶに染まずたよよ」という短歌がある。

学生だった彼のみずみずしい気持ちが伝わり、大好きな作品だが翻訳の際に困った。白鳥は「はくちょう」なのか「カモメ」なのか、それとも「しらとり」なのか。初版刷りの歌集を調べたら「はくちょう」とルビが振られていたが、

「しらとり」に変わった。その経緯がわからない。みんなはさう読んでいいのだから、同僚らに尋ねると、「はくちょう」と「しらとり」が半々に分かれた。そこでどんな情景が思い浮かぶかを絵にしてみたら、1羽の鳥を挿く人もいれば、2羽、3羽と群れている絵もある。

牧水の歌は、本でいうと余白の所を自分の好きなように描き加えたり、色付けしたりできる部分らしい作品だから、国民的な歌として残っているのだ。

英語は合理的で日本語はあいまいと言われるが、それは違う。日本語は一つの言葉にいろいろな意味を盛り込み、イメージを多形に膨らませることが出来る。

私は白鳥を「白い鳥」と翻訳したが、もつと個性的な翻訳もできるし、この歌が人から人へ伝わる中でイメージが変わっていくかもしれない。日本語は、そんなコミュニケーションを可能にするような包容力のある言語だと思つた。



熱心に聞き入る参加者たち

活字文化公開講座 in 神戸松蔭女子学院大

トークセッションで話す、(右から)山内啓子さん、ロバート・キャンベルさん、藤井雅津子さん、和田浩一さん



トークセッション

藤井 若者の活字離れが指摘されているが、言葉や漢字に対する興味は失われていない。一方で、読むことを習慣にできず、苦しんでいる人もいます。

山内 読書はコミュニケーション能力を養うための大きな情報源。本の中には他者の生活があり、

未知の世界が広がっている。小説には珠玉の会話がちりばめられており、役立つものが多い。

キャンベル 読むという行為自体がコミュニケーションだ。小説のすてきな会話の中に、思わず自分の身を置いてしまう。私はハツとするような言葉に出会うと、後

で使えるかもしれないと思ひ、手帳に書き留めている。

藤井 生徒たちは授業前の「朝の読書の時間」に、集中して言葉と向き合っている。授業でも芥川龍之介の「羅生門」や、夏目漱石の「こゝろ」などの名作は反応がいい。登場人物を批判的に見るか共感するかといった自分の立ち位置が見えてくる。

私はスポーツを題材にした文学作品に興味を持っていて。登場人物の成長や心の葛藤をドラマチックに感じられるのが魅力だ。スポーツ小説は生徒の間でも人気が高いがそれだけではない。村上春樹や森見登美彦をはじめ多様な作品が読まれており、自ら求める気持ちも強いようだ。

キャンベル 自分の立ち位置を持つことは大事。ジャンルや作家、

山内小説には珠玉の会話 キャンベル 言葉の感覚次世代へ

キャンベル 私がこだわらる漢字のグループというのがあって、さえずり偏がそうだ。「海」は言葉自体がきれいだし、青年が日本海で夕日を見ながら別れた彼女のことを考えるといった映像が勝手に浮かんでくる。

和田 柔道の創始者で、国際オ

時代などごとくたわり、それをベースに友人に恰好良く話れるとい

山内 小説の舞台がこの地域ならよくわかるというところもある。一方で、年齢によって、どの登場人物に同情するかというように立ち位置の変化もある。

キャンベル 英国へ留学した夏目漱石は、漢詩の素養を通して言葉をつくる

うという気があった。小説「暗」では「ズボン」という言葉を使う際、「洋服」という漢字に「ズボン」と仮

山内 現代人はカタカナ語を安易に使い過ぎています。

キャンベル 確かに「コンプライアンス」は「法令順守」で済む。言葉は常に動いており、淘汰されていくだろうが、心配なのは、親子と子が親しんでいる言葉やテ

レビ番組が異なるように、言葉も世代によって断絶され、コミュニケーションを阻む要因になりかねないことだ。電子書籍の普及に伴い、本を持って紙の質や重さを感じたり、図書館や書店の棚と興味深い本を発見したりといった機会は減っていくだろう。対策を考える必要がある。

私は東大の大学院生と一緒に2回ほど、江戸時代の本が残る地方を訪ね、年配の郷土史家と語り合っている。そうした世代間の交流が今の教育システムには欠けている。私は今、言葉に対する感覚をどのように若い人へ受け渡すことができるかを考えている。

山内 「この本は本当に面白いよ」と学生に伝える指導者の熱情が大事だ。

藤井 自分の読書体験を飾らずに生徒に話し、「この作品は私には面白くなかった。みんなの感想を教えてください」と挫折の経験も語っていきなさい。そして、いろんなジャンルの本に接して自分自身を鍛えたい。

神戸松蔭で学んだ古典芸能の魅力を、次世代に伝えたい。

神戸松蔭で私が得た財産は、学ぶ楽しさを味わえたこと。ゼミで文学作品を読み込み、オリジナルの現代語訳を作ったことは何よりも思い出深い。江戸時代の街並みや暮らし、道具や着物に至るまで調べ上げ、あらゆる疑問を一つずつ解決していく体験は、現在の編集の仕事でも活かされています。私が学んだ古典芸能の魅力を、未来に伝えたい。そのため書籍をつくるのが、今の私の夢です。

杉本 律美さん
[2004年 文学部文学科卒業]
株式会社文化社 ブック事業部
第二営業課 小学中学グループ

2011年4月、文学部(英語学科・日本語日本文化学科)が新しくなり、学びと就職力がさらにパワーアップ。

学科・専修を超えて学べる自由度の高い新カリキュラムが誕生します。自分の将来に合わせて、学ぶ内容を選べる「専修」の設置で専門性が、より鮮明に。必要となる知識や能力を確実に身につけて、就職の夢を叶えるチカラを育てます。

1892年創立の神戸松蔭には、豊かな教養と国際的に通用するコミュニケーション力をつけて社会に大きくはばたくことができる土壌があります。

(文学部)◎英語学科(2011年4月開設) ◎日本語日本文化学科(2011年4月開設) ◎総合文芸学科
(人間科学部)◎心理学 ◎生活学科 ◎都市生活専攻 ◎生活学科 食物栄養専攻 ◎子ども英語学科 ◎ファッション・ハウジングデザイン学科

オープンキャンパス
8/7(土)・8/8(日)・8/21(土)・8/29(日)・9/19(日)

夢を咲かせる大学。
神戸松蔭女子学院大学
〒657-0016 神戸市東灘区御影山町1丁目2-1 [TEL]078-882-6123(代表)

http://www.shoin.ac.jp/ 神戸松蔭 検索